

# 『我らが相互の友』論(1):ジョン・ハーモンの強いられた帰郷 John Harmon's Reluctant Return in *Our Mutual Friend*

榎 本 洋

## I: 序

ディケンズのテキストを振り返って目に付くことは、如何に多くの主人公、登場人物が遺産の相続、継承をその人生の最終の目標として掲げたかという事である。しかも、彼等の多くは、帰郷という形で物語に登場することが実に多い。ここに取り上げる『我らが相互の友』(*Our Mutual Friend*, 以下OMFと略)も例外ではない。1864年の5月から20回の分冊によって発行されたこのテキストは、込み入ったプロットと数多くの登場人物で際立っており、他のテキスト以上に簡単な概要は困難だろう。それにも拘らず、物語の発端が主人公ジョン・ハーモンの帰郷と財産の継承という、従来通りのボタンを踏襲している事は、作者ディケンズのこのテーマに寄せる関心の程を、本人が意識したか否かに拘らず、窺わせるのに充分である。本論文では、まずハーモンの帰郷の意味を主人公の動機、作者の意図に留意しながら考察することを足掛かりとして、このテキストと当時の流行文学の関係、プロットを支配する三通の遺書、そして老ハーモンの思惑とポプフィン夫妻の意図及びその意味などをまず考察する。最終的にはそれらがハーモンの財産継承とどのように関わるかがテーマとなる。ところで、ハーモンの帰郷を論じる前に、ディケンズがこういった財産継承のテーマを初期のテキストではどのように展開させていたかを、『オリヴァー・ツイスト』(*Oliver Twist*, 以下OTと略)を例に簡単に振り返っておく必要がある。

ディケンズが、主人公の人生の目標として財産の継承をテーマとして掲げたのはOTが最初であろう。尤もこの時は主人公は帰郷という形で物語に登場するのは異なり、身寄りのない孤児として登場する。当初、作者が“The Parish Boy's Progress”という副題を付けたように、このテキストは「寓話」という装いをまとっている(Marcus, 67)。つまり、序文で明らかにされてい

るように、“the principle of Good surviving through every adverse circumstances” (*Oliver Twist*, xxv) の具現化である。これは、オリヴァー (Oliver) が父リーフォード (Leeford) とアグネス (Agnes) の間にできた私生児にもかかわらず、正式な財産継承者となるのも、一方ではオリヴァーの「罪」が叔母のローズ・マリー (Rose Mary) の身元回復とマンクス (Monks) の不行跡によって賈われるという物語構造と密接に関わっていることから示唆される。そのため、オリヴァーの「内面の意識」が欠落しているために、主人公の財産継承はあらかじめ保障されていた印象すら受ける。或いは、主人公の「意識」の不在が、予定調和的な財産継承を円滑にしていると言っているかもしれない。いずれにせよ、このテキストにおいてはキリスト教的な意味において善意の人物には、財産と地位の保全が当初から保障されており、また人間の自然な善意が発揮され、ブラウンロウ (Brownlow) のような人物の存在を許容する環境に対しても、ディケンズの楽天的なありよう故に特に不問に付される事もなかったと思われる。少なくともこの時点では、財産の継承と信仰(善意)は不即不離の関係にあり、主人公に「意識」が生じる余地は介在しなかったと言える<sup>1)</sup>。

## Ⅱ：ハーモンの「意識」

オリヴァーからハーモンへの移行は、かなり唐突なものに映るかもしれない。なぜなら、そこにはオリヴァーには不在であった「意識」が過剰なまでに見られるからである。しかも、この過剰な「意識」ゆえに、そもそもハーモンの帰還が心理的に判りにくい、不透明な印象すら与えるからである。確かにモーティマー (Mortimer) がボッフイン (Boffin) に説明した通り、老ハーモンが残した遺産は全部で “upwards of one hundred thousand pounds” (88) 余りにも上り、ハーモンが持ち合わせた所持金、“the sum relieved by the forced sale of his little landed property” (31) を遥かに凌ぐものである。特に後者が700ポンドに過ぎないから、その差は明らかである。そのため、金に目が眩み、“I was already growing avaricious” (366) と説明しているのも一見したところ納得がいく。しかし、ハーモンが南アフリカから戻って来た経緯を説明するくだ

りは、遺産の相続が将来の生活の安定を保証するという安堵感から、一刻も早くその相続を確実にしたいと浮き立った気持ちとは程遠い、焦りに満ちたものだ。つまり、不承不承といった具合で、これは同時に父親に反抗した息子が、いとも従順に従って帰国したこととも辻褃が合わないように思われる。以下の台詞は、帰国時の経緯を述べた、有名なハーモンの独白である。

When I came back to England, attracted to the country with which I had once but most miserable associations, by the accounts of my fine inheritance that found me abroad, I came back, shrinking from my father's money, shrinking from my father's memory, mistrustful of being forced on a mercenary wife, mistrustful of my father's intention in thrusting that marriage on me, mistrustful that I was slackening in gratitude to the two dear noble honest friends who had made the only sunlight of my childish life or that of my heart-broken sister. I came back timid, divided in my mind, afraid of myself and everybody here, knowing nothing but wretchedness that my father's wealth had ever brought about. (366-7)

引用文の後半部分は注目に値する。“shrinking from my father's money…my father's memory”といった具合に父親への嫌悪感と畏怖が表明される。そして、遺産を受継ぐことで予想される災難、“wretchedness”とそれから尻込みするさまが“timid, divided in my mind”と吐露される。ここで仮にハーモンが述べる通り、父老ハーモンへの嫌悪感ゆえに「尻込み」したいという気持ちが本当であるならば、専ら金目当てで戻ってきたという、“I was already growing avaricious” (366) という説明と一見、符合するかに見える。それならば、“wretchedness that my father's wealth ever brought about” (367) とか、“the misery-making money” (379) とハーモンが考えるのは、一体どうした訳だろうか。つまり、一方では遺産を当てにしながら、他方では遺産、父親が築いた財への嫌悪感をも否定しないこのような揺れた、矛盾した心理は一体何を意味するのだろうか。

まず無視できないのが、金を手にすることへの極度の不安感、つまり、一旦大金を手にとると精神的な墮落は免れないのではないかという恐れとおのきである。既に引用したように、金銭が人を幸福にしないこと、“nothing but wretchedness” (366) しかもたらさない事はハーモンの独白によって強調されている。ところで、ハーモンと似たような状況にあった人物として、中国で事業を展開していた父の元から帰ってきたアーサー・クレナム (Arthur Clennam) がいる。『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 以下LDと略) のこの主人公は、父親が犯したかも知れぬ罪とその憤りを理由に、事業からの撤退を母親に告げた後、こんな事を口にする: “I have seen so little happiness come of money; it has brought within my knowledge so little peace to this house, or to any one belonging to it, that it is worth less to me than to another” (40)。金銭とそれに支えられた物質主義に対する反発と嫌悪感をクレナムとハーモンは共有している。更にクレナムが母親の専制的な振る舞い、“ascendancy over him [Arthur's father]” (38) のために陰気で、孤独な少年時代を過ごしたこともハーモンと似ている。ここに、『大いなる遺産』 (*Great Expectations*, 以下GEと略) のピップを加えることもできる。ところで、冒頭でオリヴァーにおける意識の不在とテキストにおける信仰 (善意) と財産の一致を再度、思い出してもいいだろう。というのは、これらの不一致とともに、テキストに新たな様相が加わったからである。それを簡単に敷衍してみよう。さしずめ様相が変わったのは『荒涼館』 (*Bleak House*) 辺りからだろう。裁判の終結を当てにして、遺産の相続を目論むカーストン (Carstone) の思惑はあっけなく拒否される。ここには遺産の相続がOTの場合のように無条件の善意によるものではなく、労働と勤勉の見返りとして与えられるという、世俗的な価値観にディケンズの現実認識が徐々に依存していくという文脈がみえる。つまり、財産と信仰 (善意) の乖離である。そして、その間隙を縫うようにして生じたのが「主人公の意識」、内面である。当初、この意識は主人公のアイデンティティの問題を軸に展開する。LDのアーサーの場合、父親の遺品から自分のアイデンティティの在りかを意識するものの、その究明には到らない。GEになると主人公を覆っていた謎は、その社会的身分 (紳士) を可能にして

いた「善意」の持ち主は誰かという、社会的な出自にまつわる謎になる。ちなみに、「善意」の持主もブラウンロウから罪人マグイッチ（Magwitch）への変遷を見れば、ディケンズの考える財産継承の条件が如何に変化したかはおおよそその見当がつくだろう。いずれにせよ、これらのテキストに関してリードは、“There is no earthly inheritance that is worth the ignominy necessary to achieve it. Only the spiritual inheritance of love is of value in this stern novel, and only those who can see beyond material concerns are capable of appreciating or inheriting the true treasures.”（Reed, 276-7）と指摘している。金銭に対して至上の物（愛、精神など）を対置してみせるのは、ある程度、許容されるものの、それ自体はありきたりである。大切なのは、“earthly inheritance”を得るのに“ignominy”に値しないのは存在しないという、指摘である。当然だがハーモンの帰郷もこれを抜きには考えられないのであり、この意味ではハーモンはクレナム以上に事態は深刻といえるかもしれない。

ハーモンの「意識」の内実には親子関係が影を落としている。これを、アーサー・クレナムと比較してみよう。アーサーを支配したクレナム夫人（Mrs. Clennam）の言動は、たとえ根底は欲得ずくであろうとも信心深く装う術を忘れなかった。粗末な食事を終えた後、聖書の一節を説む母親をみて、アーサーは“all the old dark horrors of his usual preparation for the sleep of an innocent child”（LD, 29）に襲われる。だから、アーサーが幼年時代に経験した惨めさは、金銭的なものに由来しているというより宗教的なものである。しかし、幼いハーモンが遭遇した経験は、父親の剥出しの金銭欲によるものである。実際、老ハーモンは“a tremendous old rascal who made his money by Dust”（13）と一代で財を築いた事、そして近親の者に容赦なく冷酷な振る舞いをして“its highest gratification”（13）を得ていたという。ハーモンの惨めな幼年時代はボッフイン夫人の口からも“Too many a time had I seen him sitting lonely, when he was a poor child, to be pitied, heart and hand!”と語られるが（770）、一番詳細なのはモーティマーによるものである。ハーモンの姉に婚約者まであてがいが、それに反発すと容赦なく追出したこと、当時十四才だったハーモンはそれに怖気づき、家を出奔したことなどが語られる。

...Having begun (as was natural) by rendering these attentions to the wife of his bosom, he next found himself at leisure to bestow a similar recognition on the claims of his daughter. He chose a husband for her, entirely to his own satisfaction and not in the least to hers, and proceeded to settle upon her, as her marriage portion, I don't know how much Dust, but something immense...Shocked and terrified boy takes flight, seeks his fortune, gets aboard ship, ultimately turns up on dry land among the capes wine; small proprietor, farmer, grower - whatever you like to call it.' (13-5)

モーティマーの“The Man from Somewhere”(2章の表題)の話は、言わずと知れたヴェニアリング(Veneering)邸でレディ・ティップィンズ(Lady Tippins)やトウェルモー(Twelmow)を前に披瀝されたものである。長々と引用したのは、そもそもハーモンの財産の継承に対する気乗り薄な感情が、大金を手にするのと墮落するのではないかという不安感に根ざし、それが老ハーモンなくして考えられないからである。この事は注目していいだろう。なぜなら、この不安感こそがそもそもの物語の発端となるからである。次に、ハーモンがロークスミスという別名を名乗った経緯をみてみよう。

ところで、ロークスミス(Rokesmith)がハーモンと同一人物と知れるのは、2部の14章である。その際、殺人にまつわる経緯もハーモンの独白という形で読者に提示される。例えば、帰国の船中で自分とそっくりのジョージ・ラドフット(George Radfoot)という男に出会ったこと、ラドフットと連れ立っていったSix Jolly Fellowship Porters亭で睡眠薬入りのコーヒーを飲まされたことなどである。これら事件の具体的な分析は一先ず置き、ここではいささか手のこんだ帰還、変装の計画がそもそも財産をすんなり相続するのにためらったハーモンの心理と緊密に結びついていることを確認しておけばよい。‘his first deception’(379)はこんな具合に語られる:“...When in the distrust engendered by his wretched childhood and the action for evil...of his father and his father's wealth on all within their influence, he conceived the idea of his first deception, it was meant to be harmless, it was to last but a

few hours or days.” (379)。ここに容易に父親の財産への不信感を見て取れる。更に変装の意図も “the direction of desiring to see and form some judgement of my allotted wife” (367) とベラ (Bella Wilfer) の様子を窺うためと示唆される。そして、もしベラが財産を相続しても精神的に満たされない生活を送っているのなら “another of the old perverted use of the misery-making money” (379) の例証であり、ちょうど父親が辿ったように “unhappy self-tormenting father” (787) と同じ墜跌を踏むのではないかと危惧した様が語られる。明らかに、帰国、そしてロークスミスという別人格を名乗ることの根本的な動機が、遺産の相続に対する極度な警戒心に基づいているのである。

ハーモンの独白は “uneasiness of mind” (367) 故に一見すると読者には不透明な印象しか残さないが、これを書き手、ディケンズの側から見るとどうだろうか。これについてアニー・サドリン (Anny Sadrin) は “John comes back not because he wants to but because Dickens wants him to, because it is necessary that the ambiguous drama of revolt against the father and of filial submission should once again acted out so that, in the long term, the father's will might be done” (Sadrin, 130) と、ハーモンの自由意志ではなく作家側の作為を仄めかしている。残念ながらSadrinは “the omnipotence of the father-figure” (130) と指摘するに止まっている。フェミニスト的な解釈によれば、ハーモンをよき夫へと取り込むことで父権制的な Masculinity の流布を可能にしたとSadrinの説を発展させることも可能だろう<sup>2)</sup>。しかし、たとえメディアとしてテキストがそのような「よき家庭」のイメージを流布するのにある程度の力があっても、ここでは、ポッフィン の役割を重視していく予定である。その前に、このようなハーモンの帰郷をディケンズが必要とした理由を「文学的な」観点から見たいと思う。つまり、こうした帰郷する主人公が最終的には財産を相続し、世俗的幸福を得るという結末に到るまで少しでも心理的に肉付けするためにこの独白がなされたこと。そして、この過剰ともいえるハーモンの心理描写によりテキストに転機がなされたことである。これは、当時流行していたセンセーション・ノヴェルとは一線を画すことになる。

次の章では、このテキストのもう一方の底流とも言うべきディケンズと犯罪との関わりを簡単に見てみよう。多少、遠回りになるかもしれないが、テキストがハーモンの財産継承へと展開することは、別の方面からも支えられているからである。

### Ⅲ：犯罪への関心

ディケンズが初期のテキストから犯罪、犯罪者に根強い関心を持ち続けてきたことはよく指摘されるとおりである<sup>3)</sup>。言うまでもないが、当初、OMFはハーモンとおぼしき遺体(本当はラドフットだが)をギャファー・ヘクサム(Gaffer Hexam)とリジー(Lizzie)の親子が小舟の先端につけて曳航する場面から始まる。テキストはこの事件を巡って展開する。ヴェニアリング家の晩餐会で遺言の作成を依頼されたモーティマーが、ハーモン青年の物語を語って聞かせているまさにその最中、青年の溺死が伝えられる。慌てたモーティマーとユージン・レイバーン(Eugen Wrayburn)がイースト・エンドのギャファーの家へ、それから警察へ向かう。検死ではハーモンの死を“under highly suspicious circumstances, though by whose act or in what precise manner there was no evidence before this Jury to show”(31)と他殺が仄めかされる。謎はこれだけでない。死体を見に来た“an extremely pale and disturbed face”(23)のジュリアス・ハンズフォード(Julius Handford)もそれ以降、遥として行方が判らない。ハーモン事件と謎の男、それを追跡する“the quiet Abbot of that Monastery”(26)と評される刑事の登場で、テキストは謎めいた殺人事件を軸に展開する。それは、更に被疑者のギャファーの死で頂点に達するかに見える(173)。

こう見るとOMFが、殺人事件の圧倒的な影響の下に成り立っているのを見るのは造作ないことだろう。しかし、こうした事情は何もディケンズ個人の嗜好によってのみ育まれたものではない。これは、ディケンズを取り巻く職業的(文学的な意味で)な環境にもあった。その辺りの事情をフォードは“If Dickens' hold upon critical readers after 1860 was loosened by the attractions of Flaubert, Henry James, and George Meredith, his command of



the general public was threatened by competition from a different quarter" (Ford, 177) と指摘し、その文学上の好敵手としてコリンズ (Wilkie Collins) を挙げている。つまり、こういう事だろう。(純文学) 作家として既に地位を確立したディケンズは、メレディス、ジェームズら若手作家の台頭により批評家の対象からしばし周辺に追いやられる一方、読者の関心と興味に訴える大衆文学的な方面からも脅かされていたのだ。こうした状況の中でディケンズもコリンズ等の存在を無視できず、読者の関心をどのように引き付けるか腐心せざるを得なくなったと思われる。

実際、コリンズの『月長石』(*The Moonstone*) 発表以来、60年代はセンセーション・ノヴェルという数多くのエピソードを生み出したことは文学史の常識に属する。当然、OMFもこうした文脈で捉えられた。例えば1865年の『ロンドン・レビュー』(*London Review*) の書評では、ヘッドストーン (Bradley Headstone) に見られる "great passions" を "those vulgar mistakes of nature" であるため、ヘッドストーンの人物造形が "sensational" に陥っていると述べている (Collins, 457)。「ザ・タイムズ」(*The Times*) 紙は、このテキストが所謂、"sensation" を欲する読者にも、"quiet pictures and studies of characters" を堪能したい読者にも適うと述べている (Collins, 468)。同じような事は、若きジェームズ (Henry James) の批評にも当てはまる。ジェームズは、それこそ "sensation" "sensational" という標語こそ用いていない。しかし、ヘッドストーンとレイバーンの対立、衝突が "the story of passion" であり、"a spirit of intellectual superiority" ではなく "elementary passion" で語られているとその通俗性を批判するとき、何を念頭に置いているのかおおよその察しがつくのではないだろうか (Collins, 472-3)。テキストの「扇情性」をどう扱うかは三人の評者によりまちまちである。しかし、OMFをセンセーション・ノヴェルの流行というコンテキストに置いて見ることは共通している。いずれにせよ、このような文学的な状況で、ディケンズがハーモン事件のような犯罪をテキストで扱った事は、読者向けの文学的な戦略を考えていたのではないだろうか。

従って、センセーション・ノヴェルとの共通点は次の点が挙げられよう。ま

ず同時代性である。冒頭に“In these times of ours” (1) とあるように、テキストの時代設定が執筆時期とほぼ並行していると思われる。また「死んでいる者が実は生きていた」という馴染みのボタンを可能にしたのが、分身、変装などのゴシック的な仕掛けである。ハーモンとラッドフットの驚くべき相似、“I believe we were alike in bulk and stature.” (367) などは典型的な例だろう。これは、上陸と同時にハーモンが姿を眩ますというミステリー仕掛けのプロットやハーモンのハンズフォード、ロークスミスへの変装は言うに及ばず、ヘッドストーンがライダーフード (Riderhood) と全く同じ格好をしてユージン・レイバーンを追跡する箇所 (631) にも見られる。また、“the quiet Abbot of that Monastery” (26) と言われる “the Night-Inspector” の出現、制度として整備されつつある警察の存在 (24) などが、OMFとセンセーション・ノヴェルの類似を一層はっきりと際立たせているように思われる。

#### IV：変貌するテキスト

しかしながらOMFをコリンズ一派のセンセーション・ノヴェルと同一視するのは正確ではない。確かによく指摘されるように、ハーモンの帰還と変装は、家庭教師として前夫の子供に「変装」して再会を果たす「イースト・リン」(East Lynn) のレディ・カーライル (Lady Isabel Carlyle) を思わせるが、本質的にこのジャンルの物語とは余り関係がないように思われる (Herst, 111)。似たように犯罪を扱ったのに “Down with the Tide” というルポルタージュ風の作品があり、この仕掛けのみでOMFをセンセーション・ノヴェルとのみ結びつけるのは無理があるだろう<sup>4)</sup>。これはテキストが進行するにつれ、読者の注意もハーモン殺人やギャファアの事故から、ハーモンがどのような形で遺産を相続し、“allotted wife” (367) を得るのかという問題へと収斂していく事でも明らかである。そこで大切なのが、既に指摘した2部13章のハーモンの独白である。ハーモンがポターソン (Miss Abbey Potterson) の飲屋にライダーフードを訪ね、彼の悪事を暴き、ギャファアの悪事を暴いた後で独白が行なわれる。それによればラッドフットと二人で共謀して服装を交換したこと、落ち合った宿で睡眠薬入りのコーヒーを飲まされ前後不覚に陥ったところ、もうろ

うとした意識でラッドフードとライダーフードがもみ合っているところを目撃したという(369)。これにより、冒頭でハーモンと見られた遺体がラッドフットと判明する。同時に、推理すること、演繹するためにテキストを読み進める必要はなくなる。つまり、このハーモンの独白によりディケンズはこれが巷で群小のセンセーション・ノヴェルとは似て非なるもの、と秘かに宣言しているのである。サリッジは、OMFが秘密めいた雰囲気満ちているものの、推理の対象となる秘密そのものが不在であると指摘しているが、それはこうした事情を示唆している(Sarridge, 268)。繰り返せば、ハーモンの過剰とも言うべき心理の告白が、殺人事件に関する秘密を抹殺したのである。そのため、早くも3章の終わりではハーモン事件そのものは“like the tide on which it had been borne to the knowledge of men”のように“the Harmon Murder … went up and down, and ebbed and flowed, … it got out to sea and drifted away”(31)とその泡沫のような行く末が暗示される。果たして、この事件はギャファアの死の真相とともに忘却の彼方へと押しやられ、再び関心を惹くときは、ハーモンの身元を証す手立てとして参照されるときである(763-6)。

そして、このような殺人に取って替るのがハーモンの財産の継承だが、更にはここではハーモンとベラの関係が加わる。そして、レイバーンとリジー(Lizzie Hexam)の関係も加えられる。実際のところ、テキストの展開を促すかのようにさまざまな伏線が張り巡らされている。2部の9章では、ポッフィン夫妻が計画した家族構想の夢がジョニーの死によって一旦、潰えてしまう。しかし、“If I am very much in earnest and quite determined to be unselfish, let me take care of him”(335)と「反省」したポッフィン夫人によりスロッピー(Sloppy)の面倒を見ることになり、新たな計画が再開される。また、少し前の章では“mercenary mind”(57)のウエッグ(Wegg)がヴィーナス(Venus)とともに老ハーモンの“the legend of hidden wealth in the Mounds”(303)を巡ってポッフィンを陥れようと計画を練る。それから、ハーモンがベラに求婚し、拒否される(377)。ところが、実家に戻ったベラはロークスマスの求婚をウィルファー氏(Mr. Wilfer)に嬉しそうに語り、同時にポッフィンの「変化」も“But Mr. Boffin is being spoilt by prosperity, and is

changing everyday” (460) と示唆される。少し先では(3部5章)金に窮したラムル(Mr. Lammler)がポッフインに取り入り、ロークスミスに取って替わろうと、帰宅時のポッフインを捕まえ、馬車の中であらぬ中傷を吹き込む(586-7)。これは、ポッフインがロークスミス(ハーモン)を解雇する口実になる(596)。こうみると、様々な伏線が複雑に絡み合いながらも一つの方向へと物語が指向していることが判るだろう<sup>5)</sup>。それが、ハーモンの財産相続だが、その試練として(既に引用したリードの言葉を借りれば、主人公の経験する ignominyとして)ポッフインの墮落、ベラの変化がある。

ところで、ベラについて簡単に見てみると、センセーション・ノヴェルに見られがちな固定した位置付けとは異なっている。リン・ピケット(Lyn Pykett)はここで大切なのは女性の感情表現などの表出であると指摘しておきながら、そうした女性を巡る言説を介して固定化されがちな「性別による役割」(gender role)に一石を投じる場所にこのジャンルの女性像の特徴があると述べている：“The issue of women's role within family and beyond its boundaries was of particular importance. The Woman Question and the question of woman are perhaps the central preoccupation of this genre.” (Pykett,10)。そして、このようなジャンルがこぞって提出する人物像が“fast woman”, “Girl of the Period”, “Angel in the House”, “manly man”といった典型的なイメージに有力な反証になっているという。それでは、センセーション・ノヴェルの描く女性たちがそうした固定的な女性観の境界を逸脱し、読者(とりわけ男性読者)に不安と混乱をもたらしたとすれば、我々がベラから受ける印象はどうであろうか。確かに、婚約者と死に別れ寡婦のようになったベラに、不安定な女性の立場を重ね合わせることもできよう(Surridge, 266)。しかし、ウルフアー家のつましい生活振りを見て“I can hardly believe… that I ever did endure life in this place”(310)と眩き、父親に向かって“Have resolved… that to get money I must marry money… I am looking out for money to captivate”(321)と公言して憚らないベラに、当時の女性から逸脱する不安定要素を見るのは困難である。これらのベラの台詞が、将来的には結婚という安定した身分を保証する消費志向に基づいていることは、テク

ストの進行とともに明らかになる。4部12章では母親になったベラを見て、最終的には家父長制による、理想的な家庭の主婦へと取り込まれた、と言えるからだ。しかも、ベラは、例えば『白衣の女』(*The Woman in White*)のマリアン・ハルカム(Marian Halcomb)のように男勝りの冷静さと知性で難事件(ここではハーモン事件)の解決に挑むわけではない。事件に関しては終始、傍観者である。従って、ケトル(Arnold Kettle)がベラを評して述べた有名な指摘、“graduating in the school of nineteenth-century heroines from the status of a Dora (in *David Copperfield*) to somewhere approaching that of a Nora (in *The Doll's House*)” (Kettle, 170) は、ベラをイブセンの影響を受けて生じた世紀末の「新しい女たち」の先駆けとして読み取ろうとした試みだが、試み自体は評価されても、ベラ的能力を明らかに過大評価したものであろう。つまり、ベラという女性像を見ても、OMFは一見、センセーション・ノヴェル風でありながら、内実は大きく異なるのだ。

以上、OMFとセンセーション・ノヴェルの違いを、ハーモンの帰郷の機能、その文学的な戦略、そしてベラの人物像を中心に述べてきた。以下の章では、ハーモンのその意味を更に具体的にすべとして、ポッフィン夫妻の存在、役割の意義を老ハーモンが残した三通の遺書との関係から考察する。

(続く)

注:

- 1 これについては拙論『「オリヴァー・ツイスト」：オリヴァーとマンクス、又は二人の徒弟と異母兄弟の物語』(MULBERRY, 52号、2003)を参照。
- 2 ユージン・レイバーンとジョン・ハーモンに見られる家父長的な志向については、次の論考を参照。西垣左理、「『憂鬱な男』たち－『互いの友』におけるVictorian masculinity形成をめぐる」(ダイケNZ・フェロウシップ日本支部年報 第24号、2001年)
- 3 ダイケNZが初期のテキストから殺人、犯罪者への興味を持っていたことはよく指摘されることで、とりわけ再評価の先鞭をつけたエドモンド・ウィルソンのそれは有名である。幼年時代をリージェンシーとジョージ四世時代

に過ごしたディケンズは、ヴィクトリア朝の作家たちのなかでも、恐らく最も時代に反抗的な作家ではないかと指摘する。そして、時代への批判的な態度は内向し、“At times the two themes—the criminal and the rebel—are combined in a peculiar way” (Wilson, 17) と犯罪者と反抗者の意識の一致を指摘する。ウィルソンの指摘をまつ迄もなく、初期のテキストには犯罪者があまた溢れている。OTのサイクス (Sikes)、フェイギン (Fagin)、そして「マーティン・チャズウイト」(*Martin Chuzzlewit*) のジョナス (Jonas Chuzzlewit) などはその代表例だろう。しかしながら、構成が散漫で、18世紀風のピカレスク小説の影響下にある初期のテキスト群では、犯罪行為は物語の周辺部に位置することが多く、そのため読者を意識した際物的な舞台効果を狙った印象すらあった。従って、犯罪者も副次的な人物に属することが多く、犯罪行為そのものの心理的な解剖は、そうした場面効果に埋没するか、奉仕させられることが多かったように思われる。犯罪(者)が舞台の前面に迫り出してきたのは、GEあたりからで、それが頂点に達したのはOMFにおいてであり、犯罪がテキストに投げ掛ける影はGEより更に鮮烈、直接的である。

- 4 これは1853年の2月5日の『家庭の言葉』(*Household Words*) に発表されたものであり、後に『小品集』(*Reprinted Pieces*) に収められた。ディケンズとおぼしき「私」が、Thames Police Galleryのピーコート (Peacoat) から“River thieves”やギャファーを思わせる“Dredgerman”の商売や、テムズ河に浮く自殺者の遺体などの話を取材するルポルタージュ形式の記事(‘*Gone Astray*’ and *Other Papers from “Household Words,”* 120) で、この中でディケンズは明らかに犯罪を取り締まる側に立っている。また、ハーモンの「変装」についても、その源泉として当時の劇作家、ジェイムズ・シェリダン・ノウルズ (James Sheridan Knowles, 1784-1862) の『娘』(*The Daughter*, 1837) をあげる批評や (Costell, 63)、その『秘書』(*The Secretary*, 1843) や『せむし男』(*The Hunchback*, 1832) を挙げる指摘もある (西条, 279)。しかし、このようなことは特定のテキストに還元するよりは、当時のディケンズには身近な文学上の慣習として、既に馴染みのテーマではなかつ

たのだろうか。実際、ノウルズの『秘書』が上演され、喝采を浴びたときも、『イラストレイテッド・ロンドン・レビュー』（*Illustrated London Review*）の書評では、“disguise, changed identity”といったありきたりの手法に批判も集中したのである（Reed, 291）。もちろん、このような手法が一般的であったからこそ、60年代にセンセーション・ノヴェルの流行を見たことも言うまでもないだろう。

- 5 他にも並行するプロットは、ヘッドストーンがリジーに求婚して、拒否される場面（400）とか、ベラから拒絶されたハーモンが決して名を明かさぬように誓う場面などは（380）後のボッフインの「策略」の伏線となる。

### 参考文献：

- Collins, Philip. Ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971
- Costell, Michael. *The Companion to "Our Mutual Friend."* London: Allen & Unwin, 1986
- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Oxford: Oxford University Press, 1989
- . *Little Dorrit*. Oxford: Oxford University Press, 1999
- Ford, George. *Dickens and his Readers*. New Jersey: Princeton University Press, 1955
- Herst, Beth F. *The Dickens Hero*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1990
- Kettle, Arnold. *Literature and Liberation: Selected Essays*. Manchester: Manchester University Press, 1988
- Marcus, Steven. *Dickens: from 'Pickwick' to 'Dombey'*. London: Chatto & Windus, 1965
- Pykett, Lyn. *The Sensation Novel: from 'The Woman in White' to 'The Moonstone'*. London: Northcote House, 1994
- Reed, John R. *The Victorian Conventions*. Ohio: Ohio University Press, 1975
- Sadrin, Anny. *Parentage and inheritance in the novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994

Slater, Michael. Ed. *Dickens' Journalism, Volume 3: 'Gone Astray' and Other Papers from "Household Words" 1851-59*. London: J.M.Dent, 1998

Surridge, Lisa. "'John Rokesmith's Secret': Sensation, Detection, and the Policing of the Feminine in *Our Mutual Friend*" *Dickens Studies Annual* 26 (1998) : 265-84.

Wilson, Edmund, *The Wound and the Bow*. New York: Oxford University Press, 1947

西条隆雄、『ディケンズの文学：小説と社会』（英宝社、1998）

西垣左理、「「憂鬱な男」たち－『互いの友』における Victorian masculinity 形成をめぐる」、ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報（24、2001）